

すみよし



2024年 クリスマス号 第213号

目次

☆ 聖句	SH	...	3
☆ 巻頭言	ペトロ・金 神父	...	4～5
☆ ようこそ！谷口神父様		...	6～8
☆ 赤波江豊神父の黙想のヒント		...	9
☆ 住吉教会2024年		...	10～16
☆ 受洗によせて	SH	...	17
☆ 堅信式		...	18～19
☆ 住吉教会90周年を迎えるにあたって		...	20～21
☆ 図書紹介		...	22
☆ 教会日誌		...	23
☆ 信徒動静		...	-
☆ 後記		...	24

題字: JY

表紙絵: 2025年聖年のロゴ 選: ペトロ・金神父

このロゴマークは、地球の四方から集まってきた全人類を、四人の図案化された人物によって表現しています。彼らは抱き合っていて、すべての民を結びつける連帯と友愛を示しています。

先頭の人物は十字架をつかんでいます。それは、抱いている信仰のしるしであるだけでなく、捨て去ることのない希望のしるしでもあります。人物の下に押し寄せる波は、人生の旅がいつも穏やかな歩みであるとは限らないことを示しています。個人的な出来事や世界に起きていることの多くは、より強く希望を求めさせるものです。ですから、長く伸びて、錨の形に変わって波に下ろされている、十字架の下部が強調されているのです。ご承知のとおり、錨は希望の比喩としてよく用いられます。ロゴの下部には、2025年の聖年のテーマ「希望の巡礼者」が、緑の文字で鮮やかに記されています。

「カトリック中央協議会 HP 『2025年聖年』のページより抜粋」



2

「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。左記二次元コードからのアクセスもご利用下さい。

聖句

「神の国は目に見える形で来るのではない。
また、『見なさい、ここに』とか、『あそこに』
とか言えるものでもない。
神の国は、実にあなた方の間にあるのだから」

ルカによる福音書

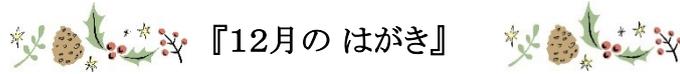
17章20－21節

選:ヨゼフ S・H



《巻頭言》

ペトロ・金 神父



『12月の はがき』

(Sr.イ・ヘイン 詩)

また一年が過ぎてしまったと
嘆いて憂鬱な気持ちになるよりも
まだ残されている時間を感謝する心を持たせてください

この一年に受けた
友情と愛の 数々の贈り物
わたしを苦しめた悲しみもいっしょに
善き心で捧げて
松ぼっくりが描かれた 感謝カード 一枚
愛する人たちに送りたい 12月



さあ、また新たに生きていかなくっちゃ
やるべきことをうまく後回しにし
小さな約束をなおざりにしながら
自分の心に鍵をかけて閉じこもっていた
一年の過ちを悔い改めて
謙虚に道を歩いていかなくっちゃ

同じ過ちを何度も繰り返す自分が
今年も憎らしいですが
後悔は深くしないでおきます
今日一日しか残されていないという思いで
時間を大切に使い
全ての人を許せば
それだけで幸せなのに…
こんな幸せまでもを 先延ばしにして生きていた
わたしの愚かさをお許してください

見るもの、聞くもの、話すことが
あまりに多すぎて、酔ってしまいそうになるこの世界で
いつも目を覚まして生きることは易しくはありませんが
目をけがれなく保ち
心を清らかに保って
一人であっても 清らかに光っている努力を
続けさせて下さい

12月になったら、古いカレンダーを壁から剥がし
新しいカレンダーを用意しながら
静かにこう言おうと思います

行け、過ぎし日々よ
来たれ、新しき日々よ
わたしを育ててくれるためにすべて必要であった
感謝すべき時間たちよ…



忙しくてせわしない日常が続くと、イライラとしてしまいます。

何日も洗い桶に積み重ねたままになっている食器。

何日も干しっぱなしになっている洗濯物。

「いったい自分は どうしてこんなに忙しいんだろう？」と不平や不満を口にするのがよくあります。でもよく考えてみると、忙しいことには理由があるものです。

なぜこんなに忙しいのか考えてみると、それは今までやったことのないことをしているからです。司祭として20年近く生きてきましたが、日本語でミサをし、説教をし、教理の勉強を指導し、会議をする、これらはすべて、これまでしたことがない事だったからです。

しかも、さらに忙しくなっているのは、普通のことだけしていれば、まだこんなに忙しくはなかったのに、普通のことを超えて、あれこれ試行錯誤しているから、さらに人生が忙しくなります。忙しくしていると、本質的なことよりも、取るに足らない、つまらないことに心を奪われることもよくあるものです。

短い時間内で言葉を覚え、慣れない環境の中でイエスさまのことを伝えていくことは、決して簡単なことではないとわかっていながら、忙しいという理由で、今のこの時間が、わたしがあれほど生きたかった瞬間であることを忘れてしまうことがあります。

今日は、忙しさを言い訳にして、今まで目を向けてこなかった、家のあちこちに目を向けたいと思います。

一年が終わろうとしています。

皆さんの今年一年は、どんな一年でしたか？

点数をつけるとしたら何点でしょうか？

あまり厳しくしてあげないで下さいね。

《ようこそ！ 谷口神父様》

4月14日、大阪・高松教区より神戸中央教会居住・ミサ協力司祭として谷口幸紀神父様が着任されました。4月28日、復活節第5主日には、住吉教会にて、ブレイズ神父様と共にミサを司式されました。今後とも、私たち住吉教会の共同体をよろしくお願い申し上げます。ご着任に際し、谷口神父様よりご寄稿いただきました。



初めまして。谷口幸紀神父(85歳)です。

小学4年の時、灘区の高羽小学校に転入し、六甲学院に進み、中2の時洗礼を受けました。18歳でイエズス会の志願者として上智大学に進みましたが、純粹培養のエリート教育に疑問を抱き、少し世間を知ってから司祭になっても遅くはないと考え、修練院を出て、一学生として哲学科を博士課程まで進み、同大学の助手になりました。



それから不思議なご縁で国際金融業に転身し、ドイツのコメルツバンク、アメリカのリーマンブラザーズ、イギリスのサミュエル・モンタギューと転職を重ね、40代でかなりの高額所得者になっていました。世界を股にかけた刺激的なキャリアを楽しんでいるうちに時は流れ、はっと我に返った時には、40代もすでに半ばを過ぎていました。まさに浦島太郎の心境でした。

お金の神様に魂を売って過ごした半生に別れを告げ、放蕩息子のように踵を返し、司祭職への道を探して教会の門を叩きましたが、どこも固く閉ざされていて、しまった！遅すぎたか？と諦めかけたとき、高松教区の深堀司教様に拾われました。司教様は私をローマの教皇庁立グレゴリアーナ大学に送り、そこで第2バチカン公会議後の新しい神学を学ばせてくださいました。大変なお恵みでした。

神学校の教授資格を取って高松に帰ってくると、司教様はすでに教区立の神学校を開設しておられました。教区の会計を任せられ私は、貸しビル住まいの神学校の慢性赤字を解消するために、1億円の寄付を集めて新校舎を建てました。神学校は常に30人前後の神学生を擁し、時には年に6人もの新司祭を輩出し順風満帆でしたが、深堀司教様の定年退職後、新しい司教様は神学校の廃止を決められました。

しかし、その存続を望まれ教皇ベネディクト16世は、神学生とスタッフをそっくりローマに移し、ご自分の保護のもとに置かれました。また、日本の教会との絆の印に、元大分教区司教の平山司教様を院長に任命し、私をその秘書にされました。こうして、神学校は引き続きローマで日本のために司祭を輩出し続けたのです。

ベネディクト16世の生前退位を受けて選ばれたフランシスコ教皇は、前任者から引き継いだ日本のための神学校を「教皇庁立アジアのための神学院」に格上げして日本に戻そうとされましたが、うまくいかず、迷走の末マカオに落ち着きました。

私は帰国し、東京を拠点に無任所の広域宣教司祭として働いていましたが、出身の高松教区の消滅に伴い「大阪高松大司教区」の司祭となり、前田万葉大司教様・枢機卿様に任命されて、キム神父様を含む4人の共同司牧チームの一員として今年の4月からカトリック神戸中央教会に住むことになりました。

私は日本では小教区の主任司祭や教区会計の仕事をし、ローマでもいくつかの小教区で働きましたが、今、改めて日本の教会の司牧の現場に入って、思うところは多々あります。教会には昔から、教皇→司教→主任司祭→助任司祭という4段階の単純明快な権限と責任の序列がありましたが、今日では深刻な召命の激減と司祭の高齢化にともない、複数の教会を複数の司祭が共同で司牧するという、教会の本来の姿になじまない場当たり的な便法が導入されています。その結果、司牧の方針決定と責任の所在が曖昧になりました。キリストが好んで用いた羊の群れと牧者の関係に喩えれば、一つの羊の群れはそれに命を懸ける一人の牧者に導かれるという緊密な関係が崩れ、複数の群れに複数の雇われ牧童が関わるが、誰もどの群れに対しても、神様の前に最終的責任を取らない曖昧な体制が採用されたという印象を受けます。羊たちにしてみれば、いざという時にどの牧童の声に従えばいいのか迷う事にもなりかねません。

私は、85歳の隠居仕事として、接する一人ひとりの信者さんを「回心」に招き、聖なるものとして確実に天国に送り届けたいと日夜骨折っています。また、まだキリストと有効に出会っていない神戸の市民の皆様には、できる限り福音を述べ伝え、「回心」を勧め、一人でも多く洗礼まで導きたいものだと思っています。

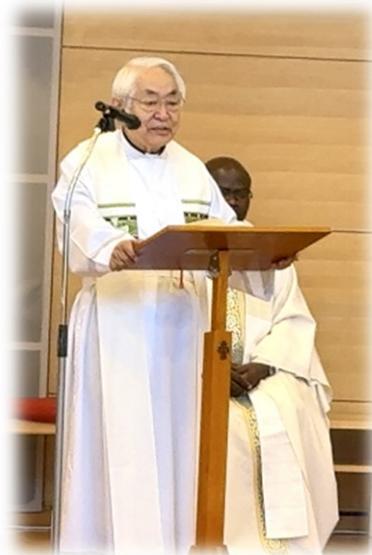
私は「回心」という言葉を繰り返し使いましたが、それには深いわけがあります。まず、私が中学2年で洗礼を受けたとき、神父様は洗礼の前提として「改心」が必要であることなど、全く教えてくれませんでした。高校を卒業し、イエズス会の志願者になり修練院に入った時も、その必要性を学習しませんでした。勉強を続け、国際金融業にうつつを抜かし、教会を離れ、お金の神様の奴隷として生きていた時も、回心が何であるか考えたことはありません。40代半ばで我に返り、教会に帰ってきた時でさえ、改心したという自覚はありませんでした。ローマで第2バチカン公会議後の教会の新しい空気に触れて初めて、カトリックの信仰にとって改心すること、悔い改めて心を入れ替えることが、そもそも洗礼を受ける前提として必要であったことを少しずつ理解するに至ったのは、50代も半ばを過ぎてからのことでした。

回心がキリスト教を他のご利益宗教と区別する決定的な鍵であること、そしてそれが公会議後の新しい信仰生活の核心であることを、私はローマで神学を勉強し、信仰生活の刷新運動に触れて初めて理解しました。もし私が日本で漫然と通り一遍の養成を受けて速成の司祭になっていたら、未だにそのことに気づかず、平気で善き牧者を自負していたに違いありません。いま私は、「日暮れて道遠し」ではありませんが、めげずに残された僅かな日々を回心の業に励みたいと心を奮い立たせています。

教会は四旬節の灰の水曜日に、「回心して福音を信じなさい」と言って信者の額に灰で十字架のしるしをしますが、ほとんどの人がそれを何かの呪文かおまじないとして受け流し、せつかくの回心の貴重な機会を無駄にしているのでしょうか。私の場合人生の大半がそのようにして空しく失われてしまいました。痛恨の極みです。

いま私は、赦される範囲で、めぐりあう信者さん、未信者さんにも回心が何であるかを具体的に知らせ、心を尽くして「回心」を勧めたいと思っています。洗礼だけ受けても、回心の業を伴っていなければ、もともと回心を知らない仏教や神道や八百万の神のご利益宗教の信者さんと変わらない自然宗教のレベルに迷っているにすぎません。死後の救いと永遠の命はその人たちと同じように心もとないかぎりです。

カトリックは自然宗教とは縁もゆかりもない全く異次元の宗教で、決して同列には語れません。それは、天地万物の創造主、自然界をはるかに超越して生きる「三位一体」の愛の神が教えてくださった唯一の超自然宗教です。「回心して福音を信じる」ことは、教会（キリストの神秘体）の一員であるための絶対必要条件です。



《赤波江 豊神父の黙想のヒント》

2023年12月24日 待降節第4主日 B年

「私は主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように。」(ルカ1:38)

教会が典礼の中で必ず使っているヘブライ語があります。それはアーメンです。アーメンは「そうです」とか、「そうなりますように」などのように、創造主に対する絶対的な信頼を表す言葉です。マリアが大天使ガブリエルに答えた「この身になりますように」は、まさにヘブライの民が唱え続けてきたアーメンであり、そのアーメンは同時に私たちの人生の指針となる言葉、人生を肯定する言葉なのです。

あのアウシュビッツ収容所を経験したヴィクトール・フランクルの著書に『それでも人生にイエスと言う』があります。彼の多くの著書は、単に人類史上空前絶後の大量虐殺の証言であるだけではなく、人間にとって限界状況と思われた強制収容所にあつて、なおも人間の尊厳を失わず、生きる希望を捨てなかつた人間の真実の証言でもあるのです。

『それでも人生にイエスと言う』は、当時の囚人たちが作った歌『それでも人生にイエスと言おう』をタイトルにしたものです。彼らはそれを歌いながら、ごく僅かでもその言葉を実行に移して、ほとんど絶望的な状況の中でも生き延びたのです。彼らは命の意味についての問いかけを、自分中心に「我々は人生に何を期待できるか」から、「人生は我々に何を期待しているか」に修正したのです。あのアウシュビッツで全てが奪われ、自分の人生にもはや何も期待できないと語った人たちは次々と倒れていきました。人生は絶えず我々に問いを提出し、我々はそれに正しく答えて行かなければならない。即ち人間は絶えず人生から、生きる意味について問われた存在である、とフランクルは述べています。

そのために彼は、何か精神的な支えが必要だった二人の男性の例を挙げています。彼らは「もはや人生に何も期待できない」として絶望のあまり自殺を試みたのですが、フランクルは、「人生が彼らに対してまだ期待しているものがある」ことを示して、彼らを自殺から救ったのです。即ち、一人の男性には大きな愛情を抱く一人の子どもが外国で彼を待っており、科学者であるもう一人の男性には、まだ完成していない本があつたのです。自分を待っている人がいる、待っている仕事がある、ということに責任を感じた彼らは、決して自らの命を放棄することなく、それをつなぎ続けたのです。

マリアはガブリエルから突然、男の子を身ごもっていることが伝えられました。当時未婚の女性が妊娠していることが分かれば、石殺しの刑が科せられたのです。マリアは目の前が真っ暗になったことでしょう。マリアはそれでも自分を待っている人がいることに気づきました。それはお腹の子どもで、自分が母親になることを待っている子どもがいる。自分はこの子のために、母親となるこの責任を引き受けなければなりません。そこから命をつないで行ったマリアこそ、「それでも人生にイエスと言おう」の言葉を生きた人の典型でした。

間もなく新しい年を迎えます。様々な試練が私たちを待ち受けていることでしょう。でもマリアと共に、「それでも人生にイエスと言おう」。

《 住吉教会2024年 》

1月1日（月）神の母聖マリア

新年ミサは、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた（ルカ2・19）」と、神の母聖マリアに祈る内容でした。

ミサの中で、ペトロ・金神父から今年1年間の取り組みとして、「イエス様の言葉を私たちが日々の生活の中で思い巡らせることが出来るよう、福音書の中からイエス様の言葉を少しずつ書き留めては」との提案とともに、それらの言葉を綴るための『万葉俳句ノート』を頂きました。

このノートは前田万葉枢機卿が「すべての人がともに、いのち輝く社会を築く」ことを願い出版されたノートで、今回のペトロ・金神父の取り組みに賛同された前田枢機卿からのプレゼントでした。



1月7日（日）主のご公現と新成人の祝福

主のご公現の主日のミサ、司式のCONSULTA神父は、「イエスはベトレヘムに生まれましたが、今もどこの家庭にもいらっしゃいます。キリスト教は国籍がありません。全ての国のものです。これが主の公現のメッセージです。そして神は、博士たちのように、私たちの道に生涯、神の子イエスを見つける大きな喜びと力を与えることを望んでおられます」とお話し下さいました。



その後、ミサの中で1人の20歳の新成人が祝福されました。

小さい頃から愛らしい様子で住吉教会に喜びを与えてくれた彼が、立派に挨拶をする姿を皆、感慨深く見守りました。

参加できなかったもう1人の新成人の方からのメッセージも読み上げられました。それぞれの地で頑張っている若い人達を思いうかべ、新成人の未来に主の大きなお恵みと祝福がありますように、と一同お祈り致しました。



2月4日(日) 聖パウロ三木のお祝いと高山右近像の祝福

2月5日の「日本二十六聖人殉教者」の日に先立ち、聖パウロ三木を守護の聖人としている住吉教会ではミサ共同祈願の中で「日本二十六聖人殉教者」への祈りが捧げられました。

ミサのあとには、コロナでしばらく中断していた住吉教会恒例の美味しいおぜんざいが当番の地区の皆様のご尽力によって準備され、楽しいひとときを過ごすことができました。



2月14日(水) 灰の水曜日

灰の水曜日、午前7時と午後7時のペトロ・金神父の司式によるミサで祝福された灰をいただきました。

「あなたはちりであり、ちりに帰って行くのです。」

この灰のしるしを受けて、心新たに主の道を歩む四旬節が始まります。



2月18日(日) 洗礼志願者の入門式

四旬節第1主日のミサの中で一人の洗礼志願者の入門式がありました。

キム神父様は式の中で志願者の方に「信仰を求めるあなたは、代父となられる方や信者のみなさんに支えられて喜びと感謝のうちにキリストの道を歩み続けてください」と話された後、按手され、代父が志願者の額に十字架の印をされました。

そして続く四旬節第3主日3月3日のミサの中では、洗礼志願者のための塗油がおこなわれました。

信仰の道へとゆるぎなく進まれる志願者の方のお姿に、私達もまた共に新たな歩みを始め、洗礼の更新に向け準備していきたいと思う四旬節でした。

(この洗礼志願者の方は5月12日に洗礼を受けられました。おめでとうございます。

P17 に「[受洗によせて](#)」と、寄稿してくださいました。)

2月25日（日） 四旬節黙想会

四旬節第2主日のミサの中で、韓国ソウル大司教区のク・ヨビ補佐司教による、四旬節黙想会が行われました。傍らでペトロ・金神父が日本語に通訳されました。

司教様はお父様が日本の上智大学に留学されていたときのできごとがきっかけでご家族がカトリック信者になったことなど、日本との関わりをご紹介くださいました。

日本の作家の作品をいくつか挙げられ、原爆が投下され廃墟となった長崎での永井隆博士の活動は、「虚無と絶望の極限の中でも、失望することなく人生の意味と生きていく勇気を信仰の中に見出すことができたのは、日本の教会の歴史と伝統に支えられた深い信仰があったからだ」と話され、また、「曾野綾子氏と尻枝神父の書簡集の中の『あなたはすべてを失った時、神を見るでしょう。絶望、そこから出発するのです』の一説が胸に響いた」と話されました。

またメシアを見分ける印として“城門の外で傷口に包帯を巻いた患者が多くいる中で、隣の人々の傷口に包帯を巻いてあげている人、その人こそがメシアだ”とのユダヤのタルムードの話を持ち、「イエス様は、人間の本性に根源的に宿る原罪までも癒して下さる救世主なのです」と話されました。

そして、「この四旬節は、今も聖霊によって生きておられる主イエス・キリストの弟子として、私たちが新しく生まれ変わる時、悔い改めと恵みの時期なのです」と締めくくられました。

ミサの最後には、ク・ヨビ司教様から韓服姿の聖母子と洗礼者聖ヨハネが描かれたとても美しい御絵のプレゼントを頂きました。そして、ク・ヨビ司教様の叙階42周年のお祝いに、住吉教会を代表してペトロ・金神父様からク・ヨビ司教様のモットーを書いた掛け軸がプレゼントされました。



3月30日（土） 復活の聖なる徹夜祭

前日夜に桜の開花宣言が出された春の夕べ、喜びの内に「光の典礼・言葉の典礼・洗礼と堅信の典礼・感謝の典礼」からなる復活の夕べのミサが捧げられました。

「光の典礼」では、教会の前庭で新しい復活のろうそくから一人一人の小さなろうそくに灯された灯をもって聖堂に入り、その灯の下で「言葉の典礼」が始まり、「今年新しく洗礼や堅信を受けられた方々の喜びに自分の今の信仰を重ね」「感謝の典礼」に与りました。

「恵みの源である神よ。私は御業によって約束のとおり永遠の命と必要なものをお与えになられる事を心から希望します。」（ペトロ・金神父のお祈りより）



3月31日（日） 復活の主日のミサ

復活とは自分にとって何を意味するのか？ そして、イエスの復活は自分と何の関係があるのか？ ペトロ・金神父はこの2つの問いかけに、復活祭は「信仰の祝日」であり、「神に向かって決意する日」であるとお説教でお話し下さいました。

ミサ後には多くの方々のご尽力により、盛大な復活祭パーティーが開催されました。

神父様のご提案で今年初めての開催となったイースターエッグ・ペインティング・コンテストには、多数の作品が出展され、厳正な審査の結果、4つの作品が受賞し、復活祭パーティーにおいて受賞式が行われました。おめでとうございます！



6月2日（日） 初聖体

キリストの聖体の祭日、ミサの中で2人のお子さんの初聖体が行われました。一年間がんばって勉強し、今日の日をむかえられました。初聖体おめでとうございます。

神父様は子供達が大好きなアンパンマンのスライドを映しながら、作者やなせたかしさんの「アンパンマンの意味」という文書をひいてお話をされました。

今日私たちがいただくご聖体を通して神のその崇高な愛がよく伝わりますように。そして、この聖体が私たちの人生の旅路の糧となり、その力によって生きていけるように一緒に祈りましょう、と結ばれました。

今日受けられた初聖体が、小さなお二人のこれからの人生の旅路の糧となり、お守りくださいますように。



6月16日（日） 聖堂献堂18周年のお祝い

カトリック住吉教会の現聖堂は6月で献堂18周年を迎えました。

住吉の共同体ができたのは、今から約90年前に溯ります。

ペトロ・金神父は、「今ここまで、力強く走ってきた共同体の姿を見て私たちはまず、感謝しないわけにはいきません。改めて強く伝えます。私たちは心強い、目に見えるものによらず信仰によって歩んでいるからです。」とお話し下さいました。

ミサ後は全員で記念撮影、そしてささやかなパーティーでお祝いしました。



8月15日（日） 聖母被昇天

平和を願うロザリオの祈りで始まり、引き続き午後7時より聖母被昇天のミサが捧げられました。今なお、いたるところで悲惨な戦争、争いが続くこの世界に、誰もが平穏な毎日が一日も早く訪れることを心より聖母マリアを通してお祈りするミサでした。閉祭後、それぞれが持ち寄った様々なマリア像をペトロ・金神父が祝別され、その後恒例のスィカパーティーで歓談の時を過ごしました。今一度、争いのない世界の訪れを心から願い、祈る夕べでした。



10月20日（日） セニョール・デ・ロス・ミラグロス

前日の雨や強風がやみ、毎年のように教会に泊まり準備されるペルーの方々のお気持ちが通じたかのように晴れ上がりました。セニョール・デ・ロス・ミラグロスのお祝いも今年で33回目。ロペス神父とペトロ・金神父司式で、スペイン語と日本語によるミサが午前10時から行われ、引き続き祭壇に飾られたキリストの肖像・ミラグロスのパネルやたくさんのお花が運び出され、おみこしに飾り付けられ、おなじみの哀調を帯びたメロディとともに、ペルーの信徒が教会の敷地内を交代で担いでまわりました。

その後、聖堂のホールで賑やかに音楽の演奏や、美しい衣装での民族舞踊などが披露されました。住吉教会の若者のバンドも参加しました。ペルーの皆さんと一緒に住吉教会の信徒もこのお祭りを楽しみました。

一年に一度、異郷で暮らすペルーの方々による故国のお祭り、故国に思いをはせ、久しぶりの再会を喜ぶ皆さんでした。



1 1月3日（日） 追悼祈念祭

1 1月2日「死者の日」の後の日曜日であるこの日、「追悼祈念祭」のミサがペトロ・金神父の司式で執り行われました。帰天した家族・友人・恩人・知人の名前を記入したカードが奉納され、共同祈願では、この一年に帰天された住吉教会の兄弟姉妹の名が読み上げられ、またゆかりのすべての死者のために祈りが捧げられました。

『私の魂よ 主を称えよ。主の計らいを何一つ忘れてはならない。』



1 1月10日（日） バーベキューパーティー

年間第32主日のミサ後、コロナ禍以降行われていなかった住吉教会恒例のバーベキューパーティーが開催されました。

当初は、お天気が心配されましたが、晴れ渡った秋空の下、美味しいお肉や焼きそば、そしてビールで笑顔が溢れる一時でした。

前日からたくさんの方々が、買い出しや下準備、そして当日は調理、と大活躍して下さい、久しぶりのバーベキューを皆、心から楽しむことができました。ペトロ・金神父もいろいろな趣向で場を盛り上げて下さり、早くも次回のバーベキューに皆の期待は向けられているようでした。ご準備下さった皆さま、参加して下さいました皆さま、神父様、そして神様にこの素晴らしい一日を感謝いたしました。



《受洗によせて》

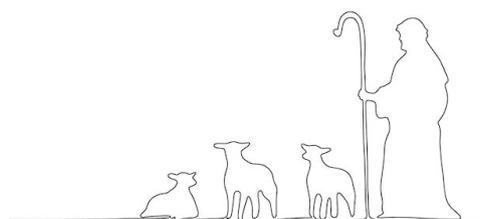
ヨゼフ S・H

今年5月12日、主の昇天の祭日にペトロ・金神父より洗礼を授かりました。この胸の内にあつた、もやもやが吹っ飛び、五月晴れのような爽やかな気持ちが広がってきたことをはっきり憶えています。

私の生まれ育った地、この住吉で新しい命を頂くことが出来たのは大きな喜びです。住吉教会が誕生した年1935年に生まれた私。白秋すでに遠く去り、今、玄冬の只中に居りますが、頂きたいのちを大切にこれからの日々を過ごしたいと思っております。

神様への感謝の気持ちで過ごしたい。ヨゼフ様の名を汚さぬ様、夫の役目、父親の役目、じいじの役目を果たしたい。住吉教会の一員であることをエンジョイしたい。

欲張っているかもしれませんが、これも生きる意欲です。
よろしくお願い致します。



《堅信式》

9月22日(日)年間第25主日のミサで、酒井俊弘補佐司教により1名の成人の方と5名の中高生の堅信式が行われました。

司教様は、「堅信式は洗礼を受けた人が信仰を堅め、より良く揺るがないものにする、大人の信者になる、そういうお恵みが注がれるものです。今日の福音書の中で、イエス様は子供を取り上げて「子供のようになりなさい」とおっしゃいます。これは子供のすばらしい点を保ちながら、大人の信者になるということです。」と話され、自分がして欲しいことを迷わずに人にしてあげることができた小学1年生の女の子のお話を通して、「私たちも心の中のイエス様の声に耳を傾けて、それが実行できるようになりましょう。」とお話しになりました。

受堅者の代表の方2名が、司教様や今日の日のために準備をしてくださった皆さまに感謝のお言葉を述べられ、閉祭後は担当地区の皆さんが心を込めてご準備くださったパーティーで、司教様を囲み歓談の一時を過ごし、ペトロ・金神父様もエプロン姿でご活躍なさっていました。



堅信式を無事に迎えることができ、ありがとうございました。

最初はあまり 堅信式について知らないまま準備を始めましたが、お勉強会で学んでいく中で、より学びを深められて少しずつ成長できたと感じました。たくさんの方に支えていただいたり、お祝いの言葉をいただいたり、とても温かい気持ちで堅信式を受けることができました。これからは、まだまだ未熟ですが一人前の信者として行動していきたいと思います。神父様をはじめ支えてくださった皆様に感謝いたします。

F・K

小さい頃から通っている慣れ親しんだ住吉教会で堅信式を受けることが出来て、誇りに思っています。大人のキリスト者としての自覚を持てたと思います。

堅信式前の勉強を教えてください、ペトロ・金神父様はじめリーダーの皆様にはとても感謝しています。僕たちの堅信式のために来てくださった酒井司教様にもとても感謝しております。普段から親しくしてくださっている KH さんが代父をしてくださって、とても心強かったです。これからの人生イエス様の考えを意識して、日々を過ごしていきたいと思っています。これからもよろしく願いいたします。

S・S



堅信おめでとうございます



《来年、住吉教会創立 90 周年を迎えるにあたって》

来年2025年は、カトリック教会の聖年であり、私たち住吉教会が創立90周年を迎える意義深い年です。

そこで、ただ単に 90周年記念で終わらせるのではなく、10年後の100周年に向けて、次のような感謝の時間を持ってみたいと思います。

まず、祈る共同体の姿を大切にして、準備した祈りを 1 年間、集会や各家庭で捧げていただければと思います。

ペトロ・金神父

住吉教会 創立90周年 記念の祈り

愛の源である、父なる神さま、

90年前に、私たちをここに呼び集め、教会を設立してくださり、

ずっと見守ってきて下さったすべての恵みに心から感謝いたします。

今、私たちは教会創立90周年を迎え、あなたの御心にかなう共同体となることをめざし、新たなスタートを切ろうとしています。

私たちが、自分を謙虚に見つめ直し、真摯に反省できますように。

私たちに知恵と変化を受け入れる勇気とすべてをあなたに委ねる謙虚さをお与えください。

心からの愛をもって、弱い立場の隣人を思う分かち合いの共同体、

自らを低くし、清い心で兄弟姉妹と向き合い仕えあう共同体、

神の御心に従いイエス様の体を分かち合いながら、聖霊の働きに応える一つにまとまった共同体、そのような共同体になれますように。

恩寵の御手をいつも必ず差し伸べてくださる神さま、

愛によって結びつけてくださった住吉教会の共同体の私たちが

お互いに相手にとって一番大きな贈り物になれるようにお導き下さい。

私たち一人一人が愛し愛される信仰者としての生活を送れますように。

そして、たとえ、そばに共にいられない時にもお互いのために

祈ることができますように。

私たちの主、イエス・キリストによって、アーメン

住吉教会共同体の守護聖人である聖パウロ・三木、

私たちのためにお祈りください。アーメン。

～住吉教会90周年にむけて～

広報チームより



1935年、パリ外国人宣教会のアルフレッド・メルシェ神父を初代主任司祭として住吉教会が創立されて、来年で90周年を迎えます。

広報チームではこれを機会に、「今の住吉教会」を文章として残したいと考え、90周年誌と呼ぶには素朴な冊子の作成を考えております。

皆さまから、信仰、いろいろなご経験、思い出、これからに向けて・・・など、幅広いご寄稿をいただき、住吉教会らしい手作りの文集を発行しようと話し合いを進めております。

詳細については、現在協議中ですが、具体的なことが決まりましたら、多くの信徒の皆さまからの文章や聞き取りの形でお声

を残し行きたいと思っております。皆さまのご意見も頂ければ幸いです。

私たちの住吉教会がこれからも地域とともに歩んで行くことができるように、また歴代の神父様方の思いを心にとめながら、皆で力を合わせてこの先の未来に向かって進むことができますように切に望みつつ、創立90周年を迎えたいと考えております。

皆さまのご協力、どうぞよろしくお願い致します。

《聖年の祈り》

2024年12月24日にバチカンのサンピエトロ寺院の聖なる扉が開かれて、「聖年」が始まります。2026年1月6日のご公現祭まで続きます。祈りのうちに聖年をお過ごしください。

天の父よ、あなたは、わたしたちの兄弟、御子イエスにおいて信仰を与え、
聖霊によってわたしたちの心に愛の炎を燃え上がらせてくださいました。
この信仰と愛によって、神の国の訪れを待ち望む、祝福に満ちた希望が、
わたしたちのうちに呼び覚まされますように。

あなたの恵みによって、わたしたちが、福音の種をたゆまず育てる者へと
変えられますように。この種によって、新しい天と新しい地への確かな期待
をもって、人類とすべてのものが豊かに成長していきますように。

そのとき、悪の力は打ち払われ、あなたの栄光が永遠に光り輝きます。

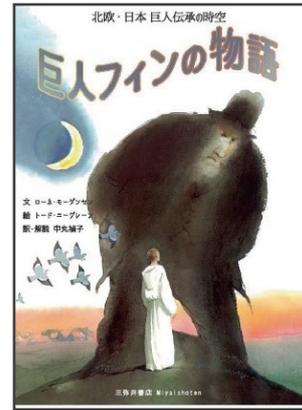
聖年の恵みによって、希望の巡礼者であるわたしたちのうちに、
天の宝へのあこがれが呼び覚まされ あがない主の喜びと平和が
全世界に行き渡りますように。永遠にほめたたえられる神であるあなたに、
栄光と賛美が世々としえにありますように。アーメン。

《図書紹介》

「巨人フィンの物語 北欧・日本巨人伝承の時空」

文:ローネ・モーゲンセン、絵:トード・ニーグレン

訳・解説:中丸禎子 三弥井書店 発行2023年

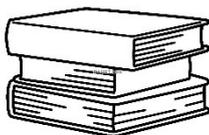


「幼子として生まれた神であり人であるイエス」について、そして「神の良い知らせ」は、全世界に拡がった。それは、ベトレヘムの羊飼いを始めとする、『伝える』という人々の大切な行いがあったからではないだろうか。

本書は、ラーシュさま、こと聖ラウレンティウスが巨人との取引によって(巨人の名前を言い当てる)、大聖堂を建造したというスウェーデン南部に伝わる物語である。表情豊かなルンドの人々、生き生きと描かれた動物たち、そして、光と影を巧みに取り入れた構図がラーシュと巨人の心境を映し出す、子供から大人まで楽しめる絵本となっている。注目は、なんと80ページにおよぶ豪華解説である。翻訳と解説は、北欧研究の第一人者、東京理科大学の中丸禎子准教授。解説では、『巨人フィンの物語』と日本の民話『大工と鬼六』、そして『進撃の巨人』を比較し、古代北欧神話『巨人による城砦建設』が根底にあることを指摘する。また中丸氏は、聖ラウレンティウスは、実際にはスウェーデンに行っていないこと、さらに、生きた時代はルンド大聖堂建築の数百年前であることを指摘する。しかし、それは「史実と違う」「不正確だ」「嘘の流通」と非難するためではなく、『神話や伝説』とは、一度成立した原典が形を変えずに残るものでもなく、伝えられる時代や地域や文化の影響下で変容し、何度も書き直され、語られ直されながら、未来へと伝えられていくものだ」と考察する。そして、『巨人フィンの物語』からは、「北欧神話とキリスト教、消えたものと残ったもの、過去と現在と未来」のつながりが見えてくる、と締めくくる。

『今、語り伝える』ことは、まだ見ぬ遠い未来につながっているのかも知れない。本書は、『伝える』大切さを考える上で極めて重要な内容が取り上げられている。

(編集部)



《 教会日誌 》

1 月	1 日	(月)	新年ミサ (神の母聖マリア・世界平和の日)
	7 日	(日)	新成人の祝福
	17 日	(水)	阪神淡路大震災 29 周年追悼ミサ (小聖堂にて)
2 月	4 日	(日)	聖パウロ三木のお祝い
	14 日	(水)	灰の水曜日
	18 日	(日)	洗礼志願者の入門式
	25 日	(日)	四旬節黙想会 (韓国ソウル大司教区、ク・ヨビ司教)
3 月	3 日	(日)	洗礼志願者の塗油
	24 日	(日)	受難の主日 (枝の主日)
	28 日	(木)	聖木曜日 (主の晩餐)
	29 日	(金)	聖金曜日 (主の受難)
	30 日	(土)	聖土曜日 (復活徹夜祭)
	31 日	(日)	復活の主日
5 月	12 日	(日)	主の昇天 洗礼式
	19 日	(日)	聖霊降臨
	26 日	(日)	三位一体
6 月	2 日	(日)	キリストの聖体 初聖体
8 月	6-15 日	(火~木)	日本カトリック平和旬間
	15 日	(木)	聖母の被昇天
9 月	15 日	(日)	敬老のお祝い
	22 日	(日)	堅信式
10 月	13 日	(日)	幼児洗礼
	20 日	(日)	セニョール・デ・ロス・ミラグロス
11 月	3 日	(日)	追悼祈念祭ミサ
12 月	8 日	(日)	待降節黙想会
	24 日	(火)	主の降誕 夜半のミサ
	25 日	(水)	主の降誕 日中のミサ



《編集後記》

今なお終結しない理不尽な戦争に、人間はここまで非情になれるものなのか、世界は止めることができないのかと、無力感に苛まれます。

そんな中、今年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（被団協）が受賞しました。同じくノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサの「大海も一滴の水から」との言葉が思い起こされます。

被団協がノーベル賞授賞式へ参加するための寄付を募ったところ、1カ月の期限を待たず、たった1日で目標額に到達したとのこと。小さな善意の一滴が大海になったことを感じました。

無力だとあきらめず、主のご降誕の希望を持って、自分にできることをしていきたいと思います。

T・Y

「明日があると思っはなりません。今日一日が大切であり、今が大事なのです。生きていることが習慣になっはなりません。朝の目覚めは奇跡です。今日一日、命をいただいたことに感謝しましょう。」バレンタイン・デ・スーザ神父の「そよ風のように生きる―旅ゆくあなたへ」の中の一節です。

シスター渡辺和子は「時間の使い方は、そのままのちの使い方です」と仰っていました。これらの言葉にあれほど感動したにもかかわらず、いつの間にか仕事や家事などに流されるまま、当たり前のように毎日を過ごしている自分があることに、ただただ驚くばかりですが、今一度自分を顧み、限りある時間、一日一日を大切に二度とないこの時を丁寧に過ごしてゆきたい・・・と心を新たにすクリスマスです。

N・I

「すみよし」第213号

発行日	2024年12月24日
発行日責任者	ペトロ・金神父 コンスルタ神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380
	https://cath-sumiyoshi.sakura.ne.jp/



教会案内



【ミサ】

日曜日	9:30
月・水・木曜日	7:00
火・金曜日	16:00
土曜日	8:00
第1・第3土曜日（スペイン語）	19:00

【講座】火曜日16:00のミサ後 カトリック教理

【教会学校】第1・3土曜日 14:00～16:00

対象:小学校1年生～6年生

【社会活動】野宿者支援の炊き出し

シナピス(難民移動移住者支援)への食料品の支援
神戸入港の外国船乗組員支援ほか

*ミサ・講座とも時間、曜日に変更がある場合があります

詳細はカトリック住吉教会ホームページをご覧ください

<https://cath-sumiyoshi.sakura.ne.jp/>



